

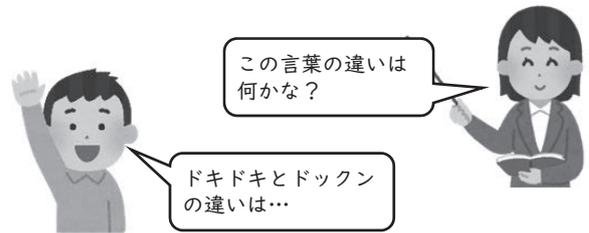
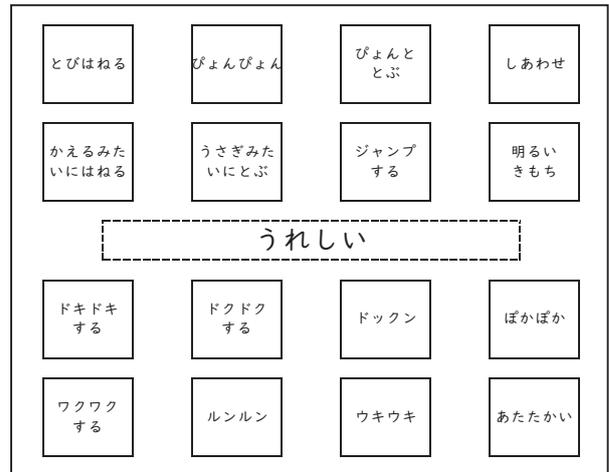


POINT |
知・技

語句の量を増やし、語彙を豊かにする授業実践

「書くこと」領域における学習で、自分の感じたことや想像したことを、詩や作文に書く言語活動をする場合があるだろう。その際、子どもたちは「楽しい」や「うれしい」といった語句をよく使うが、少し工夫することで自分の気持ちをより表現できることに気付かせたい。そのためには、語句の量を増やす必要があると考える。様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増やし、語彙を豊かにするためには、たくさんの言葉に触れることが大切であろう。そして、それらの言葉を会話や文中で使うことで定着につながると考える。

そこで、「書くこと」領域における語句の量を増やし、語彙を豊かにすることを目指した授業実践を紹介したい。



1 語句の量を増やす活動

詩を読んだり書いたりする学習に入る前に、1時間授業を行い子どもたちの言葉への興味・関心を高める取組を行った。「うれしい」という言葉を使わずに「うれしい」という気持ちを別の言葉（表情や仕草、行動、オノマトペ等）で表現する学習であり、気持ちを表す語句の量を増やすことがねらいである。

<学習の流れ～例「うれしい」気持ち～>

- ① 気持ちを表す別の言葉を付箋に書き、模造紙に貼る。(何枚でも書いてよい)
- ② 全体交流をし、どのような言葉が出たか、意味を確認する。
- ③ 出た言葉の中から、自分の気持ちを表すぴったりの言葉を1つ選んで紹介する。

出された言葉を基に全体交流を行い、言葉のもつイメージや意味について確認を行った。「ドキドキとドクンの違いはなんだろう?」など、言葉のもつイメージや意味についての発問や問い返しを行うことで、子どもたちは言葉の違いによる意味の違いについて気付くことができるだろう。

2 詩の学習における活動

語句の量を増やす活動を行った後で、子どもたちに詩を書いてもらった。普段の子どもたちであれば、「うれしい」や「楽しい」と書くと思われるところが、子どもたちの作品からは、気持ちを詳しく表現する言葉が見られ、実践の効果を感じることができた。

表現力・想像力を育む授業の工夫

音更町立音更小学校 教諭 渡辺 有紀



小学校3学年

小学校5学年

中学校1学年

POINT 2
思・判・表

「読む」から「読み取る」へ、「読み取る」から「読み深める」授業実践

小学校3学年及び4学年の「読むこと」における思考力、判断力、表現力等の指導事項に「登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像すること(C(I)エ)」「文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと(C(I)オ)」とある。これらの力の育成には、「文章を正確に読む」⇒「読み取る（意味や内容を理解する）」という2つの過程を踏まえることで、想像したり、感想や考えをもったりするという「読み深める」ことにつながるのではないだろうか。

そこで、「読み深める」力の育成を目指した授業実践を紹介したい。

1 読む活動

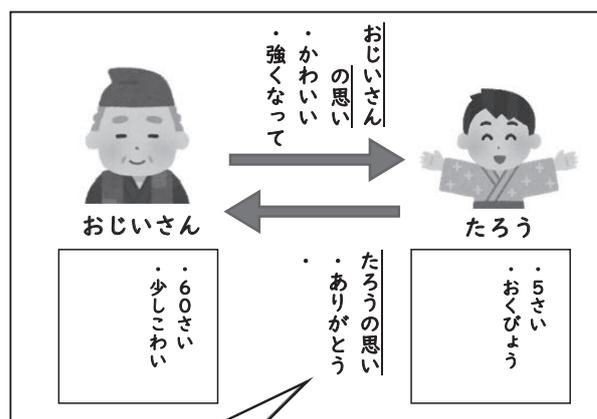
「読み深める」ためには、まず、何度も繰り返し読んで読むことが大切であると考え。音読の方法にバリエーションを付けることで、子どもたちの「読みたい」という気持ちを持続させることができ、繰り返し取り組むことで文章を正確に「読む」ことができるようになるだろう。

- 3分間音読チャレンジ
(3分間できるだけたくさん音読する)
- ダウト読み
(教師が音読し、途中でわざと間違える)
- ペア読み、グループ読み、全体読み
- 復唱(教師の後を追って読む)
- 役割読み(登場人物、語り手など役割を決めて読む)

【音読のバリエーション例】

2 読み取る活動

次に内容を「読み取る」活動を行う。その際に、人物相関図などを使って手立てを工夫することで、文から読み取ったことを自分の言葉でまとめることができると考える。イラストや吹き出しなどを使うことで、視覚的にも内容を整理することができ、内容の把握がより容易になるだろう。



【人物相関図】
登場人物の性格や関係性を場面の移り変わりと結び付けて整理することで、意味や内容を理解することができる。

3 読み深める活動

内容を正しく読み、理解することで、初めて「読み深める」ことができると考える。「読み深める」際は、登場人物の心情や作者の思いなど、文章にはっきりと書かれていない部分に着目し、発問することで、子どもたちの想像力を培うことができるだろう。

